

病虫害の発生概況

〔病害発生概況〕

1. 稲・麦・畑作物

本年の普通作においては、発生予察注意報および警報の発令は無く、全般的に病害発生は前年と同様に少なかった。イネいもち病は、各県の早期および普通期作ともに少～並発生であった。全国的に梅雨入りが遅れる中で、九州地域は平年より4～11日遅く6月9日頃に梅雨入りとなった。7月上旬に一時的に梅雨前線の活動が活発となった以外は、前線が日本の南海上に留まることが多く、梅雨明け後も少雨状態が続いたことから、いもち病菌の感染には不適な条件であったと推測される。2002年に九州全県で確認されたMBI-D耐性菌に対しては、既に各県とも育苗箱施用剤の変更が行われている。いもち病の少発生に油断することなく、採種圃場における穂いもち防除や種子消毒等の基本防除を確実に実施することが重要である。紋枯病は近年少発生傾向が続いていたが、昨年は台風による倒伏と高温により生育後期に急激な病勢進展が認められ、多発圃場では菌核形成量が多かった。このため、多発生が危惧され防除指導が行われたが、各県とも発生が多く、一部には甚発生圃場も認められた。福岡県は多発生、佐賀県と宮崎県もやや多、鹿児島県の早期作でもやや多となった。細菌性の病害では、もみ枯細菌病による苗腐敗が福岡県や佐賀県で多く、本田でも佐賀県および大分県で多発生、福岡県と宮崎県もやや多となった。また、内穎褐変病が鹿児島県でやや多かった。昨年多発生し問題となった縞葉枯病は、本年も福岡県、佐賀県および長崎県の普通期作を中心に多発生となり、熊本県でもやや多であった。佐賀県では出穂後の出すくみ症状の発生が多く、福岡県の一部や長崎県南部では甚発生圃場も認められた。ウイルス媒介虫であるヒメトビウンカの発生量と保毒虫率のいずれも高かったことが要因として上げられており、今後の発生動向が注目される。その他、ごま葉枯病が佐賀県でやや多く鹿児島県で多、福岡県や大分県でシンガレセンチュウの被害が目立った。本年はトビイロウンカによる坪枯症状が多発生したため、病害の発生が隠蔽されてしまった傾向がある。次シーズンには、増加傾向に転じた紋枯病や細菌性病害、ウイルスによる縞葉枯病等の動態に注意が必要である。

麦類では、赤かび病の多発生が心配されたが、前年に続き少発生となった。各県ともマイコトキシン暫定基準に対応するため、従来よりも防除の徹底が図られ、1～2回の薬剤散布が実施されている。なお、大分県においてチオファネートメチル剤耐性の赤かび病菌が極わずかに検出されたことから、今後の動態に注意する必要がある。オオムギ網斑病が佐賀県でやや多く、下位葉の早期枯れ上りの要因となった。本病は種子伝染性であることから、採種圃場での薬剤散布が重要と考えられる。大分県で2002年に初確認されたコムギ黄斑病は、前年より多くなった。主要品種チクゴイズミの罹病程度が比較的高く、登録薬剤もないことが防除上の課題となっている。うどんこ病やさび病類等の発生は全般に少なかった。

ダイズでは、前年に台風被害と連動して特異的に多発生した葉焼病が、佐賀

県、熊本県および宮崎県で多発生、長崎県でやや多となった。本病は暖地での発生が多いことから、主要な伝染源と伝染環を明らかにする必要がある。また、大分県では紫斑病がやや多く、一部地域で発病程度の高い圃場を認めた。

2. 野菜・花き

特に問題になった野菜花き病害の発生状況は以下のとおりであった。イチゴでは、炭疽病が福岡県、佐賀県、長崎県、大分県、鹿児島県で多発生し、苗不足が発生した。熊本でもやや多かった。萎黄病は長崎県と大分県で発生が多く、輪斑病はさちのかを栽培している長崎県で問題になった。キュウリでは、褐斑病が福岡県で多発生、佐賀県でやや多かった。本年度は黄化えそ病が問題になり、福岡県、佐賀県、熊本県、大分県では多発生または発生面積が拡大した。黄化病は佐賀県で初発生したが、昨年発生が確認された熊本県では未発生であった。タマネギべと病は佐賀県と長崎県でやや多発生または多発生した。アスパラガス茎枯病は佐賀県で多発生し、北部九州では葉枯病と褐斑病も多発傾向にある。スイカ灰白色斑紋病は沖縄県で多発生した。近年問題になっているトマト黄化葉巻病は宮崎県では前年より多発生になったが、熊本県と大分県では減少し、九州の他県においても発生面積は拡大しているものの、発生程度は軽くなっている。防虫ネット利用や粒剤施用等の対策が進んだためと思われる。

また、各県で発病が多かった上記以外の病害は以下の通りであった。福岡県では、冬春トマトで疫病、葉かび病、灰色かび病が多発生した。佐賀県では、冬春トマトの疫病、タマネギの白色疫病、べと病、白斑葉枯症がやや多かった。長崎県では、冬キャベツで黒腐病がやや多く、菌核病が多発生、冬レタスで斑点病がやや多かった。熊本県では、冬春トマトで疫病、灰色かび病、冬春ナスですすかび病、スイカでつる枯病、春・冬春メロンでべと病とつる枯病がやや多く、スイカ汚斑細菌病が発生した。大分県では、うどんこ病が多発生した。宮崎県では、冬春トマトで葉かび病がやや多発生した。鹿児島県では、冬春トマトで疫病が多発生、冬春ピーマンでうどんこ病が多発生、斑点病がやや多発生、斑点病が多発生、冬春キュウリで菌核病、べと病、うどんこ病が多発生、サヤインゲンで菌核病と灰色かび病が多発生、カボチャうどんこ病、スイカうどんこ病と炭疽病、根深ネギ軟腐病、キャベツ菌核病が多発生、ニンジン黒葉枯病、未成熟ソラマメモザイク病と露地のキク白さび病がやや多発生した。沖縄県では、冬春のピーマンとニガウリでうどんこ病がやや多発生した。

新たに各県で初発生した病害は、福岡県ではトルコギキョウ葉巻病とトルコギキョウえそ斑紋病、長崎県ではニガウリ青枯病、熊本県ではメロン黄化えそ病であった。

3. 果樹

2005年は春から夏にかけて西日本では極端な少雨、渇水状態となったため、全体的に病害の発生は並から少発生で経過した。しかし、佐賀県、長崎県、大分県、熊本県、鹿児島県では台風の上陸によってカンキツかいよう病が多発生となり、福岡県、沖縄県では発生は並発生となった。昨年夏秋梢でのかいよう病の発生が多く、その結果、越冬病斑が多くなり、台風14号も上陸したため増加したと考えられる。発病葉梢の除去の不徹底や萌芽前散布後の防除まで間

隔が開いた事も要因である。

鹿児島県喜界島、徳之島、沖永良部、与論島では罹病樹の伐採後、1年から1年半後に周辺部で罹病樹が確認された。ミカンキジラミの定期的防除が必要である。罹病から発症まで時間がかかり、疑似症状も多いので繰り返し調査が必要である。沖縄県全域でグリーンング病が発生しているが、いままで生産園での発生は無かったが、最近、山手の産地への侵入が始まっている。

カンキツの糸状菌による病害は、少雨傾向となったため全体的に並から少発生となった。そうか病の発生は沖縄では発生がやや多い。多発生の原因として6月の多雨がある。福岡県、佐賀県、長崎県、大分県、宮崎県、鹿児島県では、並から少の発生であった。

黒点病は、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、宮崎県、鹿児島県では並から少の発生であった。

平成16年に多発した果実腐敗は、少雨傾向となったため発生は少なくなり、昨年、発生の多かった佐賀県でも小発生となった。長崎県では、開花期に雨が多かったため灰色かび病がやや多の発生となった。

ぶどうでは、4月から7月が少雨傾向となったため全体的に病害の発生は並から小発生となった。褐斑病の発生が熊本県、鹿児島県ではやや多く、9月の台風の通過で急激に発生が増加した。ぶどうのべと病の発生は鹿児島県で多く、台風の通過で急激に発生が増加した。

なしでは、少雨傾向のため全体的に黒斑病、黒星病、赤星病とも小発生傾向であった。大分県では黒斑病の発生がやや多く、袋かけ前の防除の不徹底による。黒星病の発生が鹿児島県でやや多い。2004年秋期の発生が多く、越冬菌密度が高かったことと9月の台風による葉の傷と降雨によると思われる。福岡県の一部山間部で多発生した。原因としてDMI剤に対する感受性の低下も考えられたが、最近のDMI剤に対する感受性の低下は無いと思われる。

かきでも、少雨傾向となったため炭疽病、うどんこ病、落葉病とも全体に並から少発生傾向となった。

4. 茶樹・特用作物

炭疽病等の茶樹病害は、空梅雨となり高温少雨傾向が続いたことから、やや少～並発生のものが多かった。福岡県で輪斑病がやや多、宮崎県で網もち病が並～やや多であった。鹿児島県において、新たに茶斑点細菌病（仮称）の発生が認められ、特殊報第2号として6月6日に公表された。

サトウキビ黒穂病は、沖縄県でやや少～並で、前年に発生の多かった宮古島の多良間村でも平年よりやや少なかった。鹿児島県では発生時期は並であったが発生量は多となり、発生圃場率は平年より高く、罹病性品種の株出栽培圃場で発生が多い傾向が認められた。感受性品種から抵抗性品種への未更新、罹病株抜き取りの不徹底、発生圃場からの採苗等が防除上の課題と考えられる。

(九州沖縄農業研究センター地域基盤研究部 荒井治喜)

(九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部 西村範夫)

(果樹研究所カンキツ研究部(口之津) 秋田 滋)

〔虫害発生概況〕

1. 稲・麦類・畑作物

水稻：1998年の多発生以来、少発生が続いていたトビイロウンカが7年ぶりに多発し、九州各地で坪枯が発生した。トビイロウンカの飛来は、地域により6月下旬からみられたが、主要な飛来は7月10～15日であった。近年少飛来の年が続いていたため、飛来量は過去数年に較べて著しく多かった。しかし、佐賀県などでは平年並みの飛来量ととりまとめており、過去のトビイロウンカが多発した時代のそれに較べ著しく多かったわけではない。その後、高温多照のウンカ増殖に適する気候が続き、8月下旬以降、9月中下旬を中心に各地で坪枯が発生した。注意報は8月1日と9月15日に長崎県で、9月1日に佐賀県で発令された。水稻での発生面積は九州全体では103,000haで、これは水稻作付け面積の約50%にあたる。被害面積は宮崎県2,008ha、熊本県2,000ha、佐賀県1,980ha、大分県1,280haをはじめ、九州全体では約8,000haであった。2005年にトビイロウンカ被害が多かった原因は以下のように推察されている。1) 梅雨期の飛来量が多かった。また、主要な飛来が7月中旬で遅かったため、箱施薬剤の植物体濃度が既に低くなっており、効果が劣った。2) 主要な箱施薬剤のひとつであるイミダクロプリドに抵抗性がついた可能性がある。3) 短翅率の高い個体群が飛来した。4) 無人ヘリコプター散布が普及し、特に、出穂期以降の散布では、薬剤がトビイロウンカが生息する株元まで浸透しなかった。5) 無人ヘリ散布の普及で適期防除が難しくなった。6) 近年トビイロウンカの少発生が続く、発生予察や防除体制に油断があった、などである。今後、これらの要因の検証と対策が必要である。

セジロウンカの飛来量もやや多く、本田では概ねやや多発生であった。コブノメイガはやや少から並の発生であった。

近年、「過去の害虫」であったフタオビコヤガが局地的に多発するようになり、2005年も同様であった。特に、佐賀県は常発地で、葉色の濃い晩生糯品種ヒヨクモチに多発する傾向がある。近年の減農薬栽培普及が本種の害虫復活に関与している可能性が指摘されている。

斑点米カメムシ類は多発傾向が続いている。2005年は6月15日に鹿児島県の早期稲で注意報が発令された。普通期水稻では、福岡県や佐賀県でやや多から多の発生であった。

麦類：特に問題となる害虫の発生はみられなかった。

大豆：ハスモンヨトウは概ね平年並みか少発生であったが、福岡県では多かった。子実加害性のカメムシ類の発生は、福岡県や佐賀県、長崎県、熊本県、大分県でやや多から多の発生であった。

その他の畑作物：ジャガイモでは、主生産地の長崎県で秋作にジャガイモガがやや多発生であった。サツマイモでは、鹿児島県でハスモンヨトウの発生がやや多かった。

2. 野菜・花き類

共通：シルバーリーフコナジラミは、九州沖縄の各地のトマト、ミニトマトで発生が多い傾向にある。また、本種が媒介するトマト黄化葉巻ウイルス

(TYLCV) の発生も多く、鹿児島県では6月に宮崎県では、6月と10月に注意報が発令された。また、本種はピーマン、ナス、キュウリ、メロン、アスパラガスでも多発傾向にあり、同時に、各種薬剤に対する薬剤感受性低下も問題となっている。これらのコナジラミは、PCR法によるDNA解析によって、タバココナジラミのバイオタイプQであることが明らかにされ、宮崎県、熊本県、福岡県、鹿児島県、長崎県、大分県で特殊報が出された。今後、未確認地域での発生の有無に注意するとともに有効薬剤の探索等の防除対策を講じる必要がある。

各種野菜・花き類でハスモンヨトウの発生が夏期から秋期にともに多い傾向にあり、福岡県、熊本県、鹿児島県では、技術情報などによる注意喚起がなされた。また、熊本県、福岡県ではオオタバコガが秋期に多くなる傾向が見られた。

ナス科野菜：アブラムシ類、ハダニ類、アザミウマ類、ハモグリバエ類は全般に少発～平年並みの発生であった。

ウリ科野菜：アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類の発生は、全般に平年並みか少ない傾向であったが、鹿児島県ではスイカとカボチャでアブラムシ類とハダニ類の発生が多く、沖縄県ではスイカでアブラムシが多発した。

アブラナ科野菜：ヨトウガが夏秋キャベツ（熊本県）でやや多かった他は、コナガ、モンシロチョウ、アブラムシ類などの発生はほぼ平年並みの発生であった。

イチゴ：ハダニ類が育苗期、本圃ともに多い傾向にあり、秋冬期（17年10月から18年1月）に宮崎県、福岡県、佐賀県、長崎県では注意報が発令された。アブラムシ類は全般に平年並みかやや少ない傾向にあった。

ネギ類：シロイチモジヨトウが夏期に大分県の白ネギで多発し、注意報が発令された。また、福岡県の夏ネギでは、シロイチモジヨトウとハモグリバエ類の発生がやや多かった。タマネギ（佐賀県、長崎県）のアザミウマは少～平年並の発生であった。

その他の作物：ソラマメ（鹿児島県）でハモグリバエ類の発生が多かった。アスパラガスのアザミウマ類、ハダニ類、アブラムシ類の発生は平年並みであった（福岡県、佐賀県）。

花き類：キクのアザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類、ハモグリバエ類の発生は、ほぼ平年並みで推移した。熊本県では、施設栽培のバラでバラハオレタマバエが初確認され特殊報が発令された。

3. 果樹

共通：果樹カメムシ類の越冬量は、いずれの地域でも平年よりかなり少なかったため、越冬明け成虫の果樹園への飛来や被害はなかった。一方、当年世代の主要発生源となるヒノキ林の球果結実量は多かったため、新成虫の発生量は増加したが、餌不足によるヒノキ林からの離脱は9月中旬以降となった。長崎県、鹿児島県、福岡県では注意報が発表されたが、初期防除が徹底されたので被害は限定的なものに留まった。福岡県では、主要3種以外にミナミトゲヘリカメムシの被害が6、9月に一部のカキ、カンキツ園で生じ、年々増加傾向にある。また、ホソヘリカメムシやオオクモヘリカメムシの吸汁とみられる被害

も一部のカキ、カンキツ園で発生した。

カンキツ：4～6月の高温少雨傾向により、数多くのカンキツ害虫が各地で多発傾向を示した。注意報は、ミカンハダニが熊本県、大分県、宮崎県で、チャノキイロアザミウマが宮崎県で発表された。アブラムシ類の春季発生は福岡県、熊本県、宮崎県で、ミカンハダニは福岡県、佐賀県、大分県でやや多となり、また、カンザワハダニが大分県で春葉に多発した。ミカンサビダニによる果実被害は、長崎県、大分県で7月中下旬以降に、鹿児島県では9月に増加した。鹿児島県では秋季高温のため、リュウキュウミカンサビダニと混在して晩秋まで発生した。チャノキイロアザミウマの発生が佐賀県、長崎県、熊本県、宮崎県、鹿児島県で平年より多くなり、ハナアザミウマが、大分県の一部地域でカボス幼果などに傷果を生じた。クワゴマダラヒトリの発生は、越冬量増加などから佐賀県、長崎県で5月に多く、また、秋季には産卵樹のアカメガシワ上で密度が高くなった。マルカイガラムシ類やイセリヤカイガラムシの発生が、佐賀県、長崎県、大分県で多くなった。その原因は、幼虫発生期の少雨、冬季マシン油乳剤や夏季有機リン剤の防除不徹底などと考えられた。ゴマダラカミキリの発生は、放任園の増加や適期散布が実施されないなどにより佐賀県でやや増加した。沖縄県ではミカンハモグリガがやや多発した。

ナシ：ナシヒメシンクイの発生は4～7月の高温少雨傾向により、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県でやや多くなった。熊本県ではフェロモン剤の普及により、モモノゴマダラノメイガの被害が散見された。ハダニ類の発生は、佐賀県、大分県で成育期の高温少雨によりやや多くなった。

ブドウ：5～7月にかけての高温少雨傾向により、佐賀県、長崎県、熊本県ではチャノキイロアザミウマの発生がやや多くなり、また熊本県ではフタテンヒメヨコバイ、大分県ではハダニ類の発生もやや多くなった。

カキ：フジコナカイガラムシの発生は、福岡県では6月下旬の第1世代幼虫期に急増して以後も多くなり、佐賀県では4月の越冬世代虫から多発した。多発原因として、越冬量の増加、4～5月以降の高温少雨による増殖促進、齢期のばらつきで適期防除が困難であったことなどが考えられた。佐賀県では、カキノヘタムシガやハマキムシ類の発生もやや多くなった。

ビワ：長崎県では、5月中旬～8月上旬の高温少雨により、ナシヒメシンクイの被害がやや増加した。

4. 茶樹・特用作物

茶樹：九州のほぼ全域でクワシロカイガラムシの発生が多かった。そのため、4月27日と7月6日に宮崎県で、7月5日には長崎県で注意報が発令された。多発の要因としては、越冬量が多かったことや適期に防除が難しいことがあげられている。福岡県や大分県、宮崎県で、一番茶や二番茶でカンザワハダニが多発した。チャノキイロアザミウマも福岡県や長崎県、宮崎県でやや多から多発生であった。鹿児島県で5～7月にチャハマキの発生が多かった

サトウキビ：生産地である沖縄県で、アオドウガネの発生が並からやや多めの発生であった。その他の害虫は並からやや少なめの発生であり、特に問題になる害虫はなかった。

(九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部 柏尾具俊)
(果樹研究所カンキツ部(口之津) 大平喜男)